

保育における手作り紙芝居 —指導方法を探る—

鬢 櫛 久美子
岡 野 尚 子

1. はじめに

本稿の目的は、幼児教育・保育の場に手作り紙芝居を導入する場合のプログラム、保育指導法を探ることにある¹。論の進め方としては、まず、これまでの研究成果から、手作り紙芝居の活用の現状、手作り紙芝居を活用することの意義などを整理し、手作り紙芝居の教育メディアとしての意義を確認する。次に、文献をもとに、手作り紙芝居の作成方法を探る。そして、手作り紙芝居を保育に導入した実践報告から、幼児教育・保育の場における手作り紙芝居の導入方法、指導方法を検討する。以上の順番で、本稿での検討を進め、手作り紙芝居の保育指導方法を探ることとしたい。

2. これまでの研究成果²と課題

2010年より、幼稚園、保育所での紙芝居の活用状況、活用方法、紙芝居に関する保育者の意識等に関して、アンケート調査を実施してきた。また、その一方で、保育者養成課程における紙芝居に関する教育内容、方法について、養成課程に在籍している学生へのアンケート調査も実施してきた。

その結果、紙芝居を作る機会は、幼児期の子どもにも、保育者養成課程にある学生にも、非常に少ないことが明らかとなった。つまり、保育実践の場で、保育者が紙芝居を手作りすることも、子どもに手作りさせることも、ほとんどないことが明らかとなった。このような現状と連動するかのように、保育者養成課程での教授プログラムにも、学生に紙芝居を作るということは入っていない。調査の結果からは、作り方のみならず、演じ方、紙芝居についての歴史や特性についての知識もほとんど教育されていないことも明らかとなっている。

しかし、紙芝居を教育に活用することを進めてきた人々、副島ハマ、倉橋惣三、松永健哉、高橋五山らは、手作り紙芝居の教育メディアとしての

価値を高く評価している。また、本学のキッズ紙芝居コンテストの作品から、手作り紙芝居の活用の可能性を探ったところ、紙芝居を作ることが子どもの自己表出手段となり、大人が子どもを理解することにつながることも理解できた。

ことに、紙芝居の教育的効果は作り演じる一連の行為にみるという松永健哉の考えに関しても、実践報告との関連から理解することができた。実際に紙芝居を作った子どもたちは、演じたくなり、紙芝居のごっこ遊びを展開するようになったことが、手作り紙芝居を保育に導入している園から報告されたのである。言説と実践をつないだ理解ができた。

キッズ紙芝居コンテスト入賞作品の検討からは、保育に手作り紙芝居を導入することが、5領域の総合的指導を可能とすることや、保育者の実践力の向上にもつながると理解できた。

手作り紙芝居の教育メディアとしての価値は、幼児教育・保育理論と実践を主導してき人々にも認められ、実際にも教育メディアとしての有用性は高いにも関わらず、紙芝居を手作りする保育方法、そしてそれを教授する養成校のプログラムもないことが問題として浮上した。そこで、保育実践の場での手作り紙芝居の指導方法を探り、保育者養成校での教授プログラム開発が課題となった。

本稿では、上記前者の課題、手作り紙芝居の保育指導法の検討をテーマとする。

3. 手作り紙芝居の意義と作成方法

今日では、専ら、紙芝居は観て楽しむものとして認知されている。しかし、紙芝居という言葉を書名に入れた一番古い本が、昭和8年に刊行された、久能龍太郎著『紙芝居の作り方』³である。紙芝居の歴史を検討するには必ず参考に挙げられる、今井よねの『紙芝居の実際』⁴(昭和9)年に先んじて出版された書籍が、紙芝居の作り方につ

いて論じられたものなのである。久能のいう紙芝居は、現在の平絵紙芝居の前身の立絵紙芝居であるが⁵、舞台装置や紙人形を作り、演じる一連の活動を子どもたち自身によって成し遂げることの意義が述べられている。平絵紙芝居についての松永健哉の論と共通したものといえる。

紙芝居について書かれた書物の一番古いものといってもよい書籍が、紙芝居の作り方について論じたものであることは興味深い。副島ハマ、倉橋惣三、松永健哉、高橋五山らに先んじて、手作り紙芝居の意義が認められているのである。

平絵紙芝居成立以前から、手作り紙芝居の教育メディアとしての意義が認められているにもかかわらず、実際に教育や保育実践の場に活用された報告も少なく、現代においては、ほとんど実践されていないのはなぜか。その理由としては、紙芝居そのものが、児童文化財としての価値を高く評価されていないこと、学校教育の現場では他の視覚教材により活用される場を奪われてしまって、教材・教具として活用されていないことなどを原因としてあげることができる。学校教育や幼児教育・保育の場で活用されないと、教員養成課程でも保育者養成課程でも教育されない。これらのことが相まって、手作り紙芝居を経験する機会が少ないことになると考えると、いいだろう。

手作りするということとは対照的に、保育者が演じるという方法で、保育実践の場で紙芝居は大いに活用されている。紙芝居の特性を生かし、観る者の心に届くように演じるためには、下読み、舞台の活用、抜き方、声の出し方、間の取り方など演出を考えた準備と工夫が必要となる。しかし、実際には、舞台を使用することはほとんどない。したがって、十分に紙芝居の特性を意識することもなく、手にとってすぐにも演じようと思えば、それなりに実演できる紙芝居の手軽さを、重宝なものと考えた使用が一般的である。

一方、紙芝居を手作りするのは、それほど簡単なことではない。自分で、物語を考え、それを脚本にし、そして絵に芝居をさせるように描かなければならない。紙芝居の特性を理解する必要もある。作るというのはそれほど簡単なことではない上に、それを子どもに指導するとなると、容易なことではないのは確かだ。このような点も、手作り

紙芝居の実践を阻む理由として考えられる。

IT化社会といわれる今日、アナログな紙芝居の良さが認められ、全国各地で手作り紙芝居コンテストが実施されており、その数は最近増加傾向にある⁶。コンテストの実施に関わる方々により、紙芝居の作り方が論じられたものもある。そういった、書籍を参考に、作り方がどのように解説されているかを見ていくこととする。長野ヒデ子指導・監修『手作り紙芝居を楽しもう』の「手作り紙芝居の基本」⁷と、ときわひろみ著『手づくり紙芝居講座』⁸を参考にまとめると、作成手順と作成上の注意は、以下のようになる。

- ① 脚本を作る。
作りたいテーマを絞り、登場人物の会話を中心に考える。演じることを念頭に置いて演じやすいストーリーにする。
- ② 箱書き
箱文：話を場面分けして書く。
箱絵：箱文に合わせて絵を描く。
場面の展開を検討する。
- ③ ひな型
箱書きをもとに、小さな紙芝居を作り画面の抜き効果を検討する。紙芝居は右から左に抜くことを考えて絵を描く。
- ④ 試演
ひな型の紙芝居を演じ、観てもらい、感想を聞く。
- ⑤ 本書き
箱書をもとに紙芝居のサイズの紙に本書きをする。絵の裏に番号をつけ、文を書く所に注意する。絵は、遠目が効くように工夫する。

参考にした冊子は、実際に手作り紙芝居のワークショップや講座を展開する中で考えられたもので、分かりやすくまとめられている。小学生以上であれば、指導者がいれば、この手順で作ることができる。各地で、開催されている手作り紙芝居コンテストでも、ジュニア部門とされるのは小学生から中学生を指しており、幼児を対象としたものは少ない。

幼児にこの手順で、紙芝居を作らせるのには、無理があるように思う。まず、幼児は、お話を作る能力は十分に発達しているとは言いがたい。また、

絵に関しても、幼児の描く絵は1枚の中にいくつもの場面が書き込まれることが多い。連続して複数の絵を描かせることはどのようにしたら可能なのだろうか。何枚くらいが適切なのか。

紙芝居が絵とお話からできているなど、紙芝居の特性を理解させるにも工夫がいる。幼児は、絵とお話どちらから始めるのがよいのだろうか。絵とお話が対になった紙芝居を幼児が作成するには、寄り添う大人が必要である。それ故に、大人と子どものかわりが育まれるという、手作り紙芝居の教育メディアとしての意義がみとめられるのである。保育の場に、手作り紙芝居を導入しようとするシナリオ作りのために、幼児に1対1で保育者かそれに代わる寄り添う大人が必要となるため、通常の集団保育では、保育方法の開発が必要となる。子どもに紙芝居を手作りさせることが、幼稚園・保育所でほとんど実践されない理由のひとつは、このような点にあると考える。

本学のキッズ紙芝居コンテストに参加するために、実際に集団保育の中で手作り紙芝居を実践した事例報告をもとに、手作り紙芝居を設定保育として指導する方法について検討することとする。実践は、コンテスト応募作品を作成するための前段階、制作1回目と、実際の応募作品を作成する制作2回目からなる。ここでは、紙芝居の特性を理解させ、手作り紙芝居作りを動機付けることを目的とした段階、制作1回目を検討の対象とする。

4. 手作り紙芝居の実践報告

(1) 実践園における子どもと紙芝居の関わり

この園では、子どもたちは、日常的に紙芝居を鑑賞する機会がある。例えば、行事の導入、ことば遊び、物語、なぞなぞなど内容も様々で、園児にとって紙芝居は、親しみのあるメディアである。

園では日頃より、園児が表現活動を通して自分自身と向き合うことを楽しみ、同時に、他者の表現(作品等)を鑑賞したり、自分との違いに気付いて受け入れ合う関係づくりに力を入れている。その一環として、キッズ手作り紙芝居コンテストに年長児が参加することに決めたのである。

(2) 制作1回目 紙芝居の魅力に出会おう

2014年5月16日(金)

10:20～11:30

年長児 42名(男児23名・女児19名)

活動テーマ:『紙芝居の魅力に出会おう-4場面の紙芝居の制作を通して-』

【活動の概要と目的】

年長児にとって紙芝居作りが初めてであった為、まず紙芝居の魅力に出合ったいと欲し、4枚で完成する紙芝居を作ることにした。

年長児にとって紙芝居の魅力とは何か。ひとつは、年長児が保育の中で絵を描く場面では1枚で完結することが多いが、紙芝居には続きがある、という事だ。もうひとつは、紙芝居は誰かに対して演じる事によって作品がイキイキと生きてくるという特徴がある、という事だと考える。

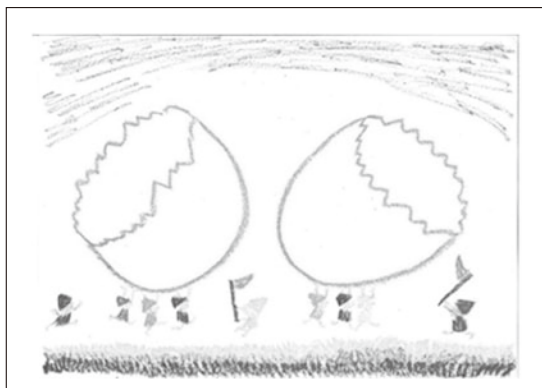
内容については、物語の連続性の有無に関わらず、各々の力に応じて4枚の紙芝居を完成させることにした。一人ひとりの年長児の内に繰り広げられるイメージの世界を絵で表現することが、必ずしも簡単ではないと考えたからだ。また、お話の内容を各々が決められるように配慮したためである。

自分自身が表現したいことが明らかになるプロセスに重点を置きつつ聞き取りを行った。他者のお話を真似る子どもがいたとしても、そのままを認め、その子どもの手によって作り上げることを重視した。

【導入】

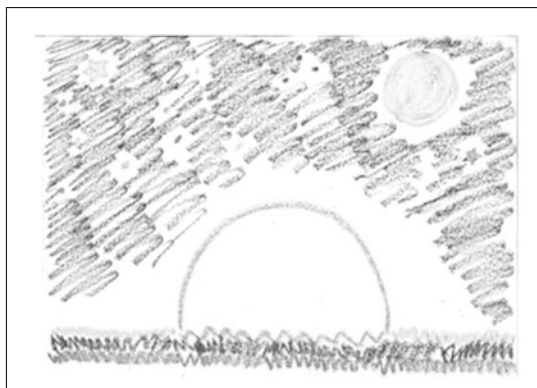
年長児が何も持たず集合している。教師は年長児と対面し、「見ててね」と言い、ジェスチャーで卵を割って見せる。年長児は、口々に「卵でしょ」という。「すごい、良く分かったね」と応え、両手に残っている物を尋ねると、「卵の殻」との声。「当たり前。では、この殻がどうなったかを見てみましょう」と誘導し、教師が手作りした4枚紙芝居(図1-①～④)を演じる。年長児は作品に注目し、紙芝居を楽しむことができている様子だった。

終了した所で「もう片方の殻はどうなったのかなあ」と問いかけると、「プールになった」とか「お風呂」「リビング」等の声が出た。続きは誰が作るかを問うと「僕たちが作ればいいよ」という答えを聞くことができた。



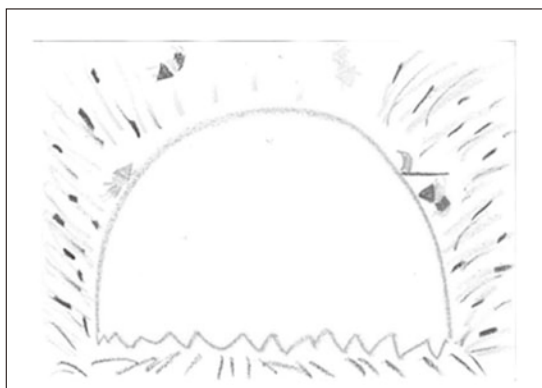
- ① 「タマゴのカラ、見つけたよ」
小人たちは、大喜びです。
皆でワッショイ ワッショイ
運ぶことにしました。

図1-①教師が手作りした紙芝居第1場面



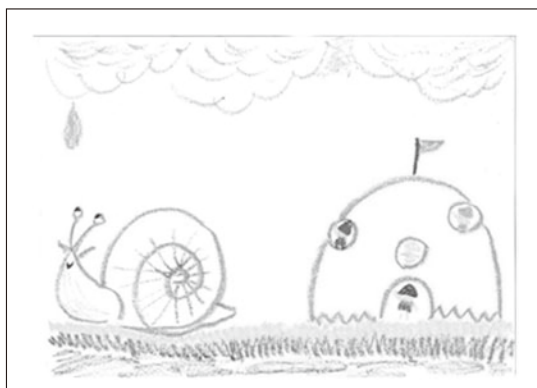
- ③ 夜になりました。
仕方がないので小人たちは、タマゴの
カラをテントにしました。
カリカリカリ、パリパリパリ、
ガリガリガリ・・・・・・・・

図1-③教師が手作りした紙芝居第3場面



- ② ところが・・・・
すってーん、ころりんっ
「わー」
タマゴのカラがひっくり返って
しまったのです。

図1-②教師が手作りした紙芝居第2場面



- ④ コケッココー、朝になりました。
「お早う！」「お早う、あれっ？」
「窓だ」「玄関もあるよ」
小人たちは大喜びです。
「カタツムリさん、ありがとう」

図1-④教師が手作りした紙芝居第4場面

【展開】

・展開-I 絵を描く

手順説明では、床に敷く新聞紙と①～④の数字が書いてあるA4サイズの画用紙の場所を示し、順序良く作業を進められる事をポイントにした。また、各自の道具箱に入っているクレパスを使用

するよう伝えた。

新聞紙は予め一人用に1枚ずつ折りたたんで重ね、出入口より南側の壁近くに画用紙①と並べて置いた。画用紙はそれぞれ1脚の椅子の上に置いた。画用紙②はピアノの前、画用紙③は北向きの壁にある柱の前、画用紙④は西向きの窓の下である。その場所は、年長児が混乱しないよう順路のように決めた(結果、誰一人として同じ番号の画用紙を複数使用することは無かった)。画用紙の①から④まで距離を置くことによって年長児に運動(移動するために歩く)の機会を与えるが、イメージを楽しんでいる脳には程よい刺激になっているように思っていることである。

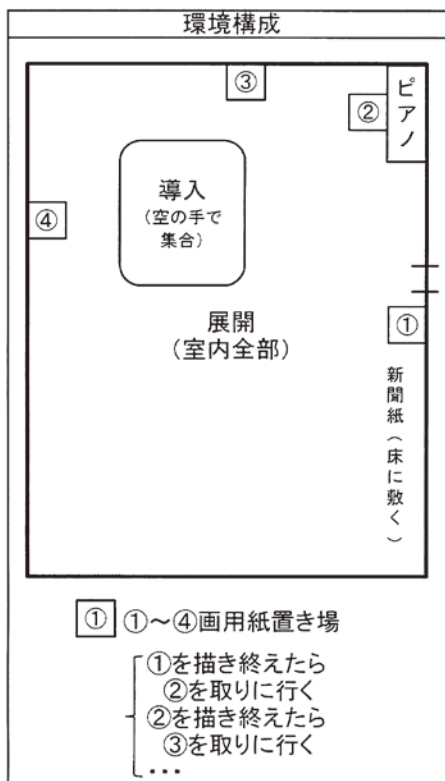


図2 子どもが4枚の絵を描くための環境構成

説明後、「お話を決めた人は準備を始めて下さい」と伝えると、殆どどの年長児が立ち上がり、新聞紙と画用紙①を取りに移動を始めた。各々、適当な場所を見つけては新聞紙を床に広げ、道具箱からクレパスを出して制作に入った。すぐに描き始める子どもが多く、イメージができてい

る年長児は、1枚描き上げる度に「次、描いていい?」と言ってくる。「どうぞ」と答えると、小走りで次の番号の画用紙を取りに行く。描き上げた作品を手を持ったまま移動する年長児もいれば、二つ折りの新聞紙の間に挟み手ぶらで次の画用紙を取りに行く年長児もいる。

ある子どもは、物語の展開が短時間で、前の場面と次の場面との間に連続性が見られる。一方で、場面展開がダイナミックで、4枚の絵がそれぞれ独立した内容になっている紙芝居を作った子どももいる。

中には、描き始めたものの自分のイメージが定まらなかったり、自信の無さそうな子どもは、近くにいる友だちの絵を真似ながら作業を続けている。また、普段は絵を描くことに変な消極的な子どもが数人いたのだが、教師の誘導後、時間はかかったものの、自分から描き始めることが出来た。いつもなら他人の目を気にして自分の作品をひたすら隠そうとする子ども、隠す仕草をしないで描いている姿を見て、担任が感動する場面もあった。

・展開ⅠⅡ お話をする

4枚目まで描き終えた年長児は、作品を持って近くの教師(聞き取り専門の3名)にお話を語りに行く。書き取るのに時間がかかる為自分の番が来るまで列で待つことになるのだが、他児の話を傍で聞きながら楽しんでいる様子が観察された。

教師には、予め、4枚とも描き終えた年長児に聞き取りをするよう指示した。また、聞き取る時の留意点として、(1)紙芝居の場面毎にお話が対応するようにすること、(2)聞き方によっては話に切れ目が無くなったり、話題が広がり過ぎる事があるので聞き過ぎないこと、(3)内容に教師の意向が入らないよう気を付けること、以上について事前打ち合わせをしたうえで実施した。

なお、今回の活動時間内に完成出来なかった年長児がいたが、後日、制作の時間と場所の提供を約束して終了とした。

(3) 制作1回目の考察

【導入についての考察】

今回、導入にかかった時間は5分余りであった。年長児の中に『作り手』への興味が湧く事と、出来るだけ長く制作に時間を当てる事を狙ったため

である。導入を短時間でを行う為に、教師の手作り紙芝居を演じたのだが、年長児は「自分にも作れそうだ」との気持ちを持つことが出来、活動にスムーズにつながったといえる。

また、年長児にイメージの世界を楽しんでほしいと考え、ジェスチャーを取り入れた。子どもにとって自由にイメージするのは楽しい作業である。紙芝居制作でも、1枚描き上げた後、次の絵を描き始めるまでの間に、“次にどうなったか”を想像（創造）しつつ作業を進めるが、子どもたちはイメージの世界を自由に動くことが出来るのだ。今回、卵を割る動作のみ示したが、子どもたちは見えないものを見ようとするゲームに一気に引き寄せられたようだった。

教師の手作り紙芝居に登場させたのは、子どもたちにとって身近な生き物『カタツムリ』である。「いいもの、大発見」と大喜びで卵の殻を運び始めた小人だった（図1-①）が、何かの拍子に卵がひっくり返って元に戻せなくなり（図1-②）、仕方が無いのでテントのようにして殻の中で夜を明かすことになった。ところが、どこからかカタツムリがやって来て、好物の殻をバリバリと食べ始めたのだ（図1-③）。夜が明け、小人が見ると、窓や出入口が出来ていて、大喜び（図1-④）、というストーリーにした。

子どもたちが積極的に話す話題には、実体験や自分が得た知識が含まれる事が多い。そこで、『カタツムリ』を飼育した時に野菜だけではなく卵の殻も食べる事を知り、子どもたちと感動を共有した体験を思い出して紙芝居の内容にしたのだった。このような身近な話題に対しても年長児の心が動き、自ら作ってみたい気持ちが強まったようだ。

こうして、年長児42名が手作り紙芝居の制作に取り掛かることになった。

【展開についての考察】

子どもによっては、物語の展開が短時間で、前の場面と次の場面との間に連続性が見られる。一方、4枚の絵がそれぞれ独立した内容になっている紙芝居を作った子どももいる。お話の内容については、物語の連続性の有無に関わらず、各々の力に応じて4枚の紙芝居を完成させることに重きを置いた。一人ひとりの年長児の内に繰り広げら

れるイメージの世界を絵で表現することが、必ずしも簡単ではないと考えたからだ。

いつもなら他人の目を気にして自分の作品をひたすら隠そうとする子どもも、隠す仕草をしなくて描いている姿を見て、担任が感動する場面もあった。これまで課題画の際に見られた消極的な態度とは異なる態度がみられた理由として、一つは、紙芝居をつくるということで、自分が表現したいことを自分で決められたからではないだろうか。二つ目は、テーマがごく身近なものに絞られていたことも助けになったのかもしれない。三つ目は、他人の作品を真似ることを禁止する空気が無かったからだと思う。教師は言葉として触れてはいなかったが、配慮点として、真似ることも一つの表現として受け入れたいと考えていた。

こうして、同じ空間で、同じ時間の中で、年長児全員が手作り紙芝居の制作に取り組めたことは大変幸いな事と思っている。

(4) 観賞会への展開

自由遊びの際、自分の手作り紙芝居を作品の棚から取り出して他児を相手に演じたり、友だち同士で作品の見せ合いを楽しんでいる姿が見られた。

そこで、担任が「いろんな人（クラスや学年を超えてという意味）と見せ合っきたいの?」と尋ねると、その通りという答えが返ってきた。

職員会議にこの件が報告され、子どもの主体的な活動を提案としてとらえ、年中児がお客になって鑑賞会が開催されることとなった。

【鑑賞会1回目】

2014年5月28日（水）

10：50～11：30

年長児 42名（男児20名・女児22名）

年中児 67名（男児38名・女児29名）

活動テーマ：『手作り紙芝居を上演・鑑賞しよう』

鑑賞会の会場は、図3のように、年中児を観客とし、その前に発表者が立ち、そのわきに教師が立つ。発表会がスムーズに行われるために、控えの年長児は観客の後ろに並んで待機し、発表の順番が近い年長児は観客の左側に一列に並んで出番を待つことにした。発表者が紙芝居をめくり、教師がお話を読み上げるという方法を取り、年長児

と教師がタイミングを合わせることが演じ方のポイントとなった。

一つひとつの作品鑑賞を共有する為に、観客の子どもには、紙芝居を上演する初めと終わりに拍手をするよう求め、年長児には、作品の最後に必ず「おしまい」と言うように、会を開始する前に指導しておいた。

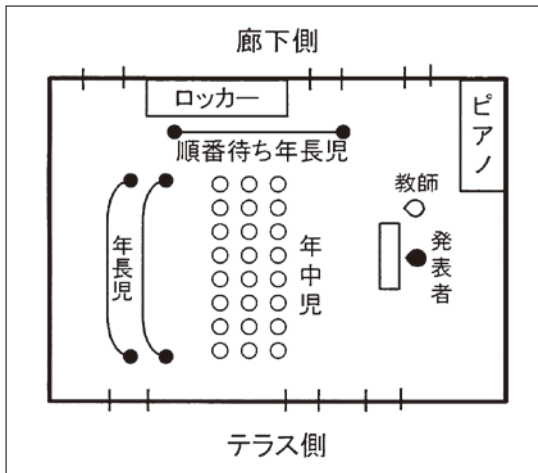


図3 鑑賞会の会場の環境構成

上演の方法を順番に述べると、以下の①から③のようになる。

- ① 演じる子どもは、自作の紙芝居と文の紙を手を持って待機する。(順番待ち位置)
- ② 自分の番が来たら、文の紙を教師に渡す。
- ③ 上演中は、演じる子どもと教師がアイコンタクトでタイミングを掴む。演じる子どもは絵の紙4枚を奥から1枚ずつ手前に動かし、教師はそれに合わせて文を読み上げる。(実際の紙芝居の抜き方とは異なるが、絵の裏にその絵のお話を書いてあるため、番号を確認して、場面をつなげていくにはこの方法がよいと考えたのである。)

作品最後に「おしまい」と言う。

鑑賞会で、観察された園児の様子は、発表者である年長児、観客である年中児別にまとめると以下のようなになる。

【園児の様子】

年長児 (演じる子ども)

- ・上演前はドキドキそわそわしていたが、初めて

の事に程よい緊張感があり、良い体験になった。

- ・絵をめくる動作が難しそうだった。
- ・絵を自分の顔の真ん前に持った為、観客の子どもから演じる子どもの顔が見えなかった。
- ・発表後はホッとした様子で、「緊張した〜」「恥ずかしかった〜」等の声が出ていた。
- ・他児の作品上演を嬉しそうなお表情で鑑賞していた。
- ・鑑賞会を行うことにより、満足感を味わうことができた様子であった。

年中児 (観客の子ども)

- ・紙芝居を演じる年長児とその作品に、熱い視線を送り続けていた。
- ・鑑賞中、「スゴイ」「面白い」等、素直に驚く声が上がっていた。
- ・初めから最後まで真剣な様子で、普段教師が紙芝居を演じる時とは違った集中の仕方だった。
- ・後日、年長児を真似て自宅で紙芝居を作った年中児がいた。

(5) 鑑賞会についての考察

- ・年長児は、これまで紙芝居を鑑賞する側にある時には受け身のままだったが、今回、紙芝居を手作りしたことによって語り手(表現者・発信者)になることが出来、主体的な活動へとつながった。
- ・自作の作品を他者に向けて上演したり、友だちの作品を鑑賞したりしたことにより、紙芝居の特性や魅力を実感できた。
- ・絵を自分の顔の真ん前に持った為、観客の子どもから演じる子どもの顔が見えなかったが、普段、教師が紙芝居を演じる際にとっている方法を子どもたちが無意識に真似ているのかもしれないとも考えられ反省させられた。
- ・年中児にとって、年長児の活動が大変魅力的であり、自分でもやってみたいという気持ちになったことは喜ばしく思える。作品を味わう機会を設けることによって、園児の活動が豊かに広がっていくと感じ、今後の活動につなげたいと考えた。

(6) 総合考察—制作1回目～鑑賞会まで—

- ・一度描き始めると最後まで手が止まらず、殆んど全員が4枚目まで続けて描くことが出来た。この事から、『4枚』は、年長児にとって無理のない枚数と言える。
- ・絵画を苦手とする園児にも同様に紹介し働きかけた結果、自分なりの絵を自ら描き出していた。表現活動として、どの様に導入し、展開し、作品を鑑賞していくのが望ましいのか、今後の保育を考える材料となった。
- ・一学年上の年長児の活動は、年中児にとって少し難しそうだが手の届きそうな魅力的な活動だ。また、自分自身の近い将来像でもあると捉えていると思われる。今回、鑑賞会を通して、年長児の活動を発展させることが出来、同時に、年長児と年中児との接点をこれまで以上に豊かに出来たことを、今後の保育活動に生かしたいと考える。次年度以降のカリキュラムにも大変参考になる取り組みだったと思う。

5. おわりに

紙芝居を手作りすることの教育的意義に関しては、「手づくり紙芝居の可能性—キッズ紙芝居コンテストの取り組みを通して—」⁹において、保育をリードしてきた人々、同時に紙芝居を教育に活用することを進めてきた人々、副島ハマ、倉橋惣三、松永健哉、高橋五山らにより、高く評価されていることを明らかにした。本稿においては、平絵紙芝居が考案される以前、立絵紙芝居の時代から久能龍太郎によって手作り紙芝居の教育的意義が論じられていることを紹介した。手作り紙芝居が教育メディアとして、推奨されているにも関わらず、これまでの調査研究から、保育現場では子どもに紙芝居を作らせることがほとんどなされていないことが明らかである。そこで、本稿では、紙芝居を保育の中で子どもに作らせる実践の事例報告をもとに、手作り紙芝居の指導方法の検討をした。ワークショップや手作り紙芝居コンテストを実践してきた方々による解説書にある、紙芝居の作り方は、幼児の発達の視点から、それらをそのまま適用することには無理があるのではないかと考えたからである。

実践園は、日常的に紙芝居を鑑賞する機会があ

り、園児は紙芝居に親しんでいる。しかし、作るとなると、特別な指導が必要となるとが考えられる。制作1回目は以下のような課題があり、指導に工夫がなされているといえる。

- ①紙芝居が絵とお話から構成されていることを子どもに理解させる。
- ②通常の絵画制作では、子どもの絵は1枚で完結させたものとなる。連続して何枚かの絵を描くことをどのように指導すべきか。
- ③お話を子どもが想像し、創作できるようにするにはどのような指導方法が適切か。
- ④絵に対応させたお話を書き留める大人のかかわりは、どのような注意が必要か。

導入として、教師が実際に4場面の紙芝居を手作りして子どもに見せることで、紙芝居の特性を理解させた。紙芝居の内容を、子どもが保育の中で実体験した内容で構成することで、興味関心を起こさせている。同時に、紙芝居作りを、保育の中にうまく位置づけているといえるだろう。

演じ方も、ジェスチャーを用いて、眼に見えないものをイメージさせ、空想し想像の世界に子どもたちを招き入れることで、子どもたちに、作ってみたい、自分にもできると思わせる工夫がなされている。

絵画制作を苦手とする子どもにも、抵抗なく絵を描かせることができた。この点は、紙芝居の特性と関係があるのか、また、あるとすれば、絵とお話がセットになっているためであるのか。この点は、興味深い。

4場面の紙芝居を作るための工夫として、4枚の画用紙を離して置いたという、制作室の環境構成が効果的であったとあってよいだろう。子どもは、1枚描くとその続きを想像しながら次の紙を歩いて取りに行くようにということが目論まれている。

聞き取る時の留意点として、(1)紙芝居の場面毎にお話に対応するようにすること、(2)聞き方によっては話に切れ目が無くなったり、話題が広がり過ぎる事があるので聞き過ぎないこと、(3)内容に教師の意向が入らないよう気を付けること、この3点を事前打ち合わせにより決めたいと実施している。

複数（この場合は3名であるが）の教員で、実

施する場合に共通した方法を取るべきことは言うまでもないが、子どもに寄り添い子どもの声を聞くという視点が重視されており、保育方法全般にわたる保育力の向上にもつながるだろう。

また、この園では日頃より、園児が表現活動を通して自分自身と向き合うことを楽しみ、同時に、他者の表現(作品等)を鑑賞したり、自分との違いに気付いて受け入れ合う関係づくりに力を入れており、作品の制作を通して、自己表現、作品の鑑賞を通して他者理解をするというねらいを持って保育が実践されている。紙芝居が自己表出手段であり、それを演じることにより自分の思いが他者に受け止められ、他者理解につながるという紙芝居の特性に見合った活動が、常日頃から表現活動の達成目標として意識されており、手作り紙芝居導入の基盤ができていく園であると考えられる。鑑賞会への発展は、このような日常の保育の積み重ねの上にあるのではないかと推測される。日常保育に掲げている目標を達成するためにも、手作り紙芝居は、保育教材・教具として有効であることが実証されたといえる。

最後に、保育においても最も大切なことがこの実践報告にはある。それは、「紙芝居の魅力に出合っただけで欲しい」と考え、4枚で完成する紙芝居を作ることにした」という言葉に表れている。ねらいとしては、紙芝居の特性を理解させるということであるが、それを「紙芝居の魅力に出合っただけで欲しい」といっていることに、保育実践者である教師が紙芝居を魅力的なものとして捉え、それを子どもとともに楽しみたいと考えていることが見て取れる。倉橋惣三の自分が好きなことは子どもにさせてあげたいという考え方が、この手作り紙芝居保育の指導法の根底にある。

紙芝居の魅力をまず幼児教育者・保育者が知り、保育に導入するようにすべきである。そのためには、養成校での紙芝居教育のプログラム開発が必要となる。今後の課題としたい。

(紙芝居作りを保育実践の中で試み、研究に協力してくださった、T幼稚園の教諭の皆さんに感謝する。)

註

1. 鬢櫛久美子他「手作り紙芝居の可能性ーキッズ紙芝居コンテストの取り組みを通してー」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.34. 2012年において課題とした、手作り紙芝居を子どもに指導する方法の検討である。
2. 『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.32. 2010年からNo.35. 2013年に掲載の紙芝居関連の共同研究の成果である。
3. 久能龍太郎 『紙芝居の作り方』春陽堂 少年文庫 1933年
4. 今井よね 『紙芝居の実際』キリスト教出版社 1934年
5. 現在のようスタイルの紙芝居を平絵紙芝居と呼ぶ。平絵紙芝居は、1930年に考案されたといわれるが、それ以前には、現在のペープサートのような形式の紙人形を用いた立絵紙芝居というものが流行していた。
6. 1980(昭和55)年に神奈川県立図書館が主体となって「手づくり紙芝居コンクール」がはじまり、現在は「紙芝居文化推進協議会」がその運営を引き継ぐ。1989(平成元)年には「箕面紙芝居まつり」も行われるようになった。いろいろな地方に紙芝居の手作りの取り組みが広がっている。2007(平成19)年に、名古屋柳城短期大学では、大人と子どもの関わりを育むことをねらいとして「キッズ紙芝居コンテスト」が開始された。紙芝居は誰かに演じてもらって楽しむものということだけでなく、作ることに活用する意義も見出されてきている。
7. 長野ヒデ子指導・監督 名古屋柳城短期大学編集『手作り紙芝居を楽しもう 紙芝居をみんなで元気に』2007年12月1日に実施した名古屋柳城短期大学フォーラム「手作り紙芝居の作り方」をもとに作成された小冊子である。
8. ときわひろみ『手作り紙芝居講座』日本図書館協会 2009年
9. 前掲書 鬢櫛久美子他「手作り紙芝居の可能性ーキッズ紙芝居コンテストの取り組みを通してー」

Teaching Method of Creating “Kamishibai” in Kindergarten

Bingushi, Kumiko*

Okano, Naoko**

本稿の目的は、幼児教育・保育の場手作り紙芝居を導入する場合のプログラム、保育指導法を探ることにある。これまでの研究成果から、手作り紙芝居の活用の現状、手作り紙芝居を活用することの意義などを整理し、手作り紙芝居を保育に導入した実践報告から、幼児教育・保育の場における手作り紙芝居の導入方法、指導方法を検討した。

導入として、教師が実際に4場面の紙芝居を手作りして子どもに見せた。紙芝居の内容は、子どもが保育の中で実体験したこと構成し、子どもの興味関心を引き出している。

通常の絵画制作では、子どもの絵は1枚で完結したものとなる。連続した4場面の紙芝居を作るための工夫として、4枚の画用紙を教室の中に離して置き、子どもは1枚描くとその続きを想像しながら次の紙を歩いて取りに行くように環境構成をしている。子どもから絵に対応したお話を聞き取る時には、(1)紙芝居の場面毎にお話に対応するようにすること、(2)聞き方によっては話に切れ目が無くなったり、話題が広がり過ぎる事があるので聞き過ぎないこと、(3)内容に教師の意向が入らないよう気を付けること、この3点を事前打ち合せて注意することにしていた。

以上のような指導方法が有効であったことは、子どもたちの自発的な活動がもととなり、紙芝居鑑賞会へと保育実践が発展していることが示している。

キーワード：手作り紙芝居, 保育, 久能龍太郎

*Nagoya Ryujō Junior College

**Principal, Toyota Kindergarten Attached to Nagoya Ryujō Junior College